

源語奧旨全



文詞乃其書阿多之也。高山其末。恒山乃
其意より。さし所あり。一法也。身つ。可川
此をやく世亦。さし所あり。さし所あり。乃とさし
了。天乃其。魚昨。さし所あり。さし所あり。こ
母。摺。真。さし所あり。さし所あり。此。家長。乃。新。世。ん
不。良。さし所あり。さし所あり。也。才。中。此。利。禄。也。身。誰
さし所あり。九。毛。つ。常。也。此。才。さし所あり。さし所あり。安。中。は。

詔に、是れ大佛を造る。其の如く
女が好むを造る。其の如く
了る。其の如く。

神武天皇紀文二千五百三十五年
十二月

本邦學報

源語 奥旨

近藤芳樹著

明治五年の東京日新堂の雑誌に。方今文明日進。學校の
盛あるを。古來以て嘗て。就中西京
に於て。中小學の設け。大小備を。是れ云々の末に。西京
乃女子を。從來容貌の美を以て。天下に冠たる者なり。
今も。才學を研ぶ。善を盡し。美を盡す。以て。古
昔紫式部清少納言等。才且美あり。其の如く。西京の女子。豈
到底實用の學にあらず。今一兩年を經て。西京の女子。豈

此輩乃下み阿らんやとあるをよむ。予大に感ずておも
へらく。予少年の時と坐。鬚を然る結丈夫たつ。式部の
著とちる源氏物語を好む。其結末昏々たる阿るた涉獵し。
猶補注をよむとせんとおもつり。此日誌をよむと猛
省をよむ。實は報顔の至りたる。故に其志を翻る。法は
み筆を抛ちたりき。此頃某日の長支に倦て。机に倚りか
ゝる。おぼえむ一睡したりし。おぼえむけさの紀上臈の女
房。予が側み来りたる。以てささの憂思を帯多るおぼえ
に。予に以て履らく。妾も一条のみよと結きおぼえ上東門

院は仕る。式部といふ女あり。妾むる源氏物語を著
はる。あるに。とむ人妻が深意の阿る處を。らむ。たその
文辞をのよ善し。徒らみ好色の媒とをり。妾實はこれ
を愧ぶ。抑此物語と。いと權臣の跋扈を憎む。皇族の衰微
を憂る著る昏あり。其方も志多る如く。仁徳天皇の。
炊煙のまくなれを見そおほし。三年の調賦を免し。あ
るは。一人の御仁心を及ぼし。萬民を救ふ御仁政とあ
し。あるなり。これ天下を御心のま。あ。ある。
然るを延喜の帝に至るは。冬の夜。貧民の寒き。堪えん

らとをおろしめし。御衣を脱ぎおぼしめさる。そ
乃叡慮を難有けれら。此時貧民を救はせむこと
を聞けり。かく一人は御仁心おぼしめさる。萬民よ
おぼしめしあふ御仁政のちりしは。いふこといふに。權
臣の勢を強くして。天下を叡慮乃まよえまほりぢらた
まふこと能まほりしゆえなり。さるより。寛平上皇乃
菅公を拔擢し。冷泉のみつと西宮殿を登庸しあつる
いふ。さるその權臣の偏執より貶降せしめて。たましく他
氏の政を預る者せば。うしく乃如く鋤え除き。いとも尊こ

き一世二世の皇族を。さるごとく其門は家禮をせ
らむるに至る。世の中はあつ藤氏の掌握に歸したる
と。一人ごよろり眉を顰めし者せし。妻心よらね成
憤りし。いふ。婦人の身なれば。いふんともせん。いふ
あり。こそよ。さるして此物語を著はせり。其大旨は。ちり
に源氏の君と。攝家の嫡子頭中將とを對偶し。て。頭中
將。この源氏の君よ仕ふる。全く主従の如きさまに。つ
えりなり。それより次第の昇進も。さる源氏を。頭中將よ
す。上等よす。め。皇族はさるべし。支物そといふこと

示し。源氏の子夕霧の君に至ると。頭中將の子柏木。其外の諸子と對耦となり。猶夕霧と上等とす。是れも。まゝの皇后も。當時も。まゝ藤氏ありてハ居るはぬ。例あるを。はゞめよ源氏の君乃養女。六条の御息所みせどの御女みむすめを入内せし。後ハ源氏乃實子明石の姫君と入内せし。是れ共に中宮とす。その御腹の匂兵部卿宮を。東宮とす。おはしませぬ。夕霧の弟。女三の宮腹の薰大將を始。攝家の諸子孫も戴さき重んぶ。東宮と同トさま。敬うやまひのつく如く作りあした。是れも見る人々ハ文章よめ

心をよせたり。まゝ。ふ。こゝに眼を着るゆのちのりき。ささぶ實をかく。筆の鋒かみを以てたす。攝籙の勢いきりを挫くじ。皇族を尊とくせんとき。その苦心。をかく。等閑まなざしのこゝとあはさりし。今や聖天子御位を継あひて攝關將軍と廢せし。庶政を古より復し。あはるに妾の蓄懐も。まに晴て。泉下の鬱念も頓ハ散せり。然るを其方。半生の力を此昏ハ尽し。あはさ。更に妾の深意を解けき。日誌とす。て。忽ち此學を廢せんとするを。さす。愚ある者。あたと去て。以づく。つ立去りぬ。目覺る枕り。げた

きは。蟬の聲さやのに耳より夕日の影すでも西に傾
けり。さうも怪しき夢を見しあはと。つづく思へば。
實に式部が此書を作さる。此意ありてのこととある。
されを當時。一條の帝。此物語を見あむ。式部の日本紀
をとく讀める女なり。とのうまひよ。日本紀の
御局と稱せしもの。帝はのちのたすは。日本紀。神代
に起りて持統天皇に至る。その間數十代。朝威盛ん
に。皇族尊と。諸臣卑しく。上下の分正しあり
しに。奈良の御代以來。漸く攝籙の勢ひ強くなり。皇族

のゆく衰へたるを。式部心は憤り。上古はかくはあ
りし物と思ふあり。皇族の源氏の君と以ふを主と
なり。攝籙の御子頭中將と以ふを客とあり。そより次
々に。夕霧柏木白宮薰大將の類ひの。主客對耦。空は架
く虚は憑りて。以て巧みに。いづをもめでたく作らる
物あり。權門の嫌疑を憚り。深意を表にあらはさず。韜
晦し。さうけりしを。一人もそのよしを知る人な
りし。一條の帝はあり。悟らせあることあり
て。日本紀をよく讀める女とてのたまはる。その御言を

つと。あゝど譽たがに。誰もく。日本紀の御局との稱なづたり
しこと。殆たゞ千年に近きまで。更ふ其名義を辨わふる人あり。
つとに皇族を尊たひ。權門を卑たむ。深意の大義へうづら
まはせし。彼安藤爲章の七論もこれに及たむ。藤井高尚
の日本御局考の如き。殊に迂遠乃説しる。采るに足
らざるを予しもかく。茅塞を一夢み開けり。以もつと
まうき。とに何なむ。あもれ式部御堂殿の私せん
あらまへりし。拒こる。従したがひざる。到いたりて。王室の衰
微せを憂うれふ。大志を蓄たくへながる。その意ひとく。孔子春

秋を何なむ。あつる物もうげをのせめて。慷慨の心を
紙上よりさだ。生涯を全くせしは。まことに賢女の鑑
ともいふべく。あれを實用の學よ何なむ。いさ。何なむ
の實用の學とせん。さるば上等の女子ありて。此書を學
ばん人い。まつ式部の日記をよむ。其自ら矜たらで身みを慎し
む。平常を志しり。さる後のちに學ぶべし。あつらば其人ひと。必かなら
ず貞順婉淑。君子の配あり。恥はむことあり。あつらば
西京の女子のそと。諸國の婦人。中等より以下の者
の。中小學よ入いて物學せん。心こを磨とひ。日誌にいるが如

くまるといふ

まゝ此物語に。弘徽殿の女御。久しく後宮に侍ひあひ
て。太子を産まひひつゝ。後に入内する藤壺
乃女御の。されば立后ありし事を記せる。さるに皇后
とありあふに。貞静純一の女を選ませあつるゆゑ
に。さるに皇族臣族のいかにあつたこと。聖
武の御代に。藤原淡海公の女光明子の。夫人より直ち
に皇后お降りあつる。これ其實に藤氏の権威盛んを
言ふより。妃よりさる夫人を以て。押して皇后と

たるものあり。後宮職負令を勅るに。妃は四品以上。夫
人に三位以上。嬪は五位以上とあり。これおよる時に。
妃の内親王あり。夫人の臣族の貴女。嬪の臣族のあり
あり。やゝ位卑き女あり。故に妃夫人嬪共。さる御妾
あり。その出自より。三等の分ちあり。上等が
妃あれば。貞純の女と選ませあつた理あり。これども。
物ほのむに。必ず内親王の妃たることを。皇后とすべ
き。却て夫人ありし光明子を皇后としたりし。當
時淡海公執權あり。勢ひの強かりしを以ての故あり。

然れども妃といひ夫人といふに既に。抑結構のふ名
目も尊卑あるまゝに。つひふこれを嫌む。以つとあ
く其名を廢し。妃夫人の二負をひとりに併せ。女御と
改め。嬪を更衣と改めたるも。とち藤氏のせしわざな
る也。式部ありに眼を着けし。皇族の藤壺の女御を。藤
氏の弘徽殿の女御より。されば皇后といはるも。上
古は妃夫人の差別ありしを。ゆめいへば。まゝ皇族を
尊といひ。藤氏を貶せしむ。一證とすべしなり。

予近藤翁の門に在て。源語を讀むつは。淺見に
し。其一斑をも窺ふると能はさりき。然るは翁の
卓識。よくその真旨を探り。明らるるを併し。讀者を
よそ惑ふことありしむ。實に讀むの深切ありと
いふなり。且其文の閑雅ある。始と長日午睡中の一
夢に托し。以て徐々を説起し。其要旨を述べ。當時
の形勢と論じ。現今實用のあたりに及せり。抑揚の巧
ある。翁の筆鋒も。まゝ皇學を志す者の固陋を挫くに
足まるといふなり。然るは此書。源語真旨と題して。

一冊子となり。源語を読む者の。尤も注意すべき大
要を示せるは。各書に。始を東京新聞紙中へ載せ
る所の西京女學校の条を借きて筆を起せる。恐ら
くは。大家の著作に似ざるの誹りある。夫は新聞
誌なるものなり。一時の談柄に備ふるものありて。一
閱し終るば。反古に属するもの多し。源語を読むは
このりの者。豈新聞誌中の論を信じて。紫式部清少納
言を以て。西京進學の婦女子に及ぶべしとせんや。願
くば前後を削り。只長日の一夢より書起し。當テ

實用の事小及同し。以て世に公けし。然るに。

明治八年五月

井關美清

美清の古語説。以ておぼせ。餘蘊なき。仍て前後を
削らん。とて。思ひ出づること。何れ昔宋の僧に。居
簡といふる詩人あり。葉水心。その詩集に上生日の
詩あり。成論して。林下名作將以無遠不可使千載之
後集中有上生日詩と。うきつけたるを。居簡その詩
を除く。して。その語を詩集の端に鏤せたるより
を。五總志に載せし。前輩相與之情類如此といふなり。

予はまゝの體に倣ひて。西京女子の件を其終よ抄記。
美清の語を卷末に記せるものあり。

近藤芳樹識

源語真旨終

源九

明治九年十二月出版

著述者

近藤芳樹

第三大區拾壹小區四ッ谷
仲町三丁目拾四番地寄留

山口縣士族

第一大區九小區竹川町
拾二番地平民

出版人

松村幸太郎

